カ　算数・数学の「学習内容表」作成の取組

学習指導要領の精査と学習内容表の作成

本グループでは，学習内容表を作成するに当たって，「目標の掴みやすさ」「内容の分かりやすさ」に留意して取り組んだ。まず，項目と下位項目の整理を行った。

項目については，学習指導要領の「数量の基礎」「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」の項目をそのまま使用することとした。

下位項目については，解説を読みながら検討を行った。学習指導要領には内容の表記の一部に下位項目として設定できる表記があり，それを学習内容表では見やすいように抜き出した。このような表の作り方をすることによって，下位項目を目印として学習内容を探すことが容易になり，「学びの履歴」としても使いやすくなると考えた〔図－33〕。

〔図－33　算数・数学の項目と下位項目の表記〕

次に，学部－段階ごとに起こした下位項目の系統性についても整理し，横に並べて配置するようにした。このような配置にすることにより，今学んでいることの基礎として，これまでどのような学習の積み重ねがあったのか，また，今後どのような力へと発展させなければならないかなど，算数・数学の資質・能力を育成するに当たっての道筋が捉えやすくなった。

次に，内容の表現の検討を行ったが，その際，「授業の中で実際にどういうことを指導していくのか」の視点で整理することとした。この視点で見た場合，中学部・高等部の内容については，「2位数の加法及び減法について理解し・・・」など「何を」学ぶのかについて分かりやすい表記となっている。

しかし，小学部は抽象的な表記が多く，例えば，「10までの数の数え方や表し方」の「ものとものとを対応させることによって，ものの個数を比べ，同等・多少が分かるこ

と」では，どんな指導を行うのか，児童生徒は何ができるようになれば，その力が身に付いたと言えるのか，具体的にイメージすることが難しかった。そこで，解説から「積み木を積んで比べるなどすることで，どちらが多いか分かる」などの具体例を抜き出して加えることによって，イメージしやすくする工夫を行った。

さらに，系統性を担保するために，内容を加えた部分もあった。時間や時刻についての学習は，どの児童生徒にとっても身に付けたい力の一つであると考えるが，学習指導要領では，小学部3段階と中学部の1段階でのみ取り扱う表記となっている。

そこで，グループで検討し「段階的に学ぶ」「より実際の生活に生かす内容」といった観点から，学習内容表には他の段階にも「時間や時刻」の下位項目を付け加えることとした〔図－34〕。

〔図－34　学部段階の系統性から　内容を追加した部分〕

以上のように，内容の表記については，より具体的な内容を示すことができたと考える。また，学習指導要領各教科等解説を基に，内容を説明する文や具体例を加えたことによって，生活の中で必要となる力の育成を目指した「学習内容表」とすることができたと考える。しかし，すべての項目や内容について十分な検討を行うことはできていないので，今後は実践も踏まえながら，細部についても協議を行う必要があると考えた。

グループで出た意見・考察等

今回の学習内容表の作成の取組を通して，取り組む中で難しかった点と，教師の学びとなった点について整理した。

難しかった点は，学習指導要領に示された膨大な算数・数学の内容を，見やすく・分かりやすくまとめなければならなかった点である。特に小学部での抽象的な表記について，活動がイメージできるように具体化することは難しかった。また，系統性をもたせた内容の整理も検討に時間を要した。

学びとなった点は，学習指導要領でも実際の生活と関連させた指導が目標に示されており，生活で生きる算数・数学の指導について検討できた点である。具体的な指導の仕方についても，解説に記述されていたことから，具体的な授業のイメージを広げることができた。「学習内容表」に整理して配置することは難しかったものの，学部間との系統性を確認できた。

この取組により，これまで曖昧だった「算数・数学の教科の見方，考え方」「算数・数学の学習を通して育成を目指す資質・能力」についても，改めて検討を深めることがで

きたことは大きな成果である。今後の授業作りにも生かしていきたい。

キ　音楽の「学習内容表」作成の取組

学習指導要領の精査と学習内容表の作成

本グループでは，まず，学部別の目標を読み合わせ，比較を行った。

小学部の主なキーワードとして，「音楽のつくり」「感じたこと」「楽しさ」「身の回りの様々な」などが挙げられた。小学部は，まず，身の回りの音や音楽を感じて，楽しさを味わう段階であると捉えることができた。また，学習指導要領各教科等解説に「『音楽に親しむ態度』とは，生涯にわたって音楽に親しもうとするための基本的な力を養う。」と示されていた。この「音楽に親しむ態度」は，高等部まで貫かれたものであることが分かった。

中学部の主なキーワードとしては，「音楽の構造」「表したい」「考えて」「思いや意図」「よさ」「進んで」「様々な」などが挙げられた。解説には，「小学部での，音や音楽を受け止め，感じたことを表現する段階から，自分はどのように表現したいかを考えながら，主体的に表現していく段階が中学部のねらいとなる。」と記載されており，中学部は，様々な音楽に対し，考えたり，思いをもったりしながら主体的に表現する力を育む段階であると捉えた。

高等部の主なキーワードとしては，「多様性」「創意工夫」「自分なりに評価」「美しさ」「音楽を愛好する心情」「感性」などが挙げられた。解説には「中学部での，自分はどのように表現したいかを考えながら主体的に表現していく段階から，他者のイメージに共感したり，音楽を形づくっている要素の働かせ方などを試行錯誤したりながら，表したい音楽表現について考え，表現していくのが高等部段階のねらいとなる。」と記載されており，これらの力が生徒の卒業後の生活を豊かにしていくのではないかと考えた。

さらに，各学部の段階別の目標の分析を行った。学部別の目標を，段階を追って達成できるような表記になっていると捉えられたが，その中でも，小学部1段階の知識及び技能の「つながる」というキーワードから，小学部1段階は小学部2段階から高等部2段階までを支える基礎となっていることが確認できた。

次に，学習内容表の項目設定に取り組んだ。項目については，学習指導要領と同様とした。項目は，「表現」「鑑賞」及び「共通事項」である。下位項目は「表現」について「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「身体表現」の4つがあり，さらにその下位の項目として，育成を目指す資質・能力別に「思考力，判断力，表現力」「知識」「技能」の3つがある。「表現」の4つの下位項目それぞれについて，さらに下位の項目として「思考力，判断力，表現力」「知識」「技能」を設定することで，育成を目指す資質・能力に応じ

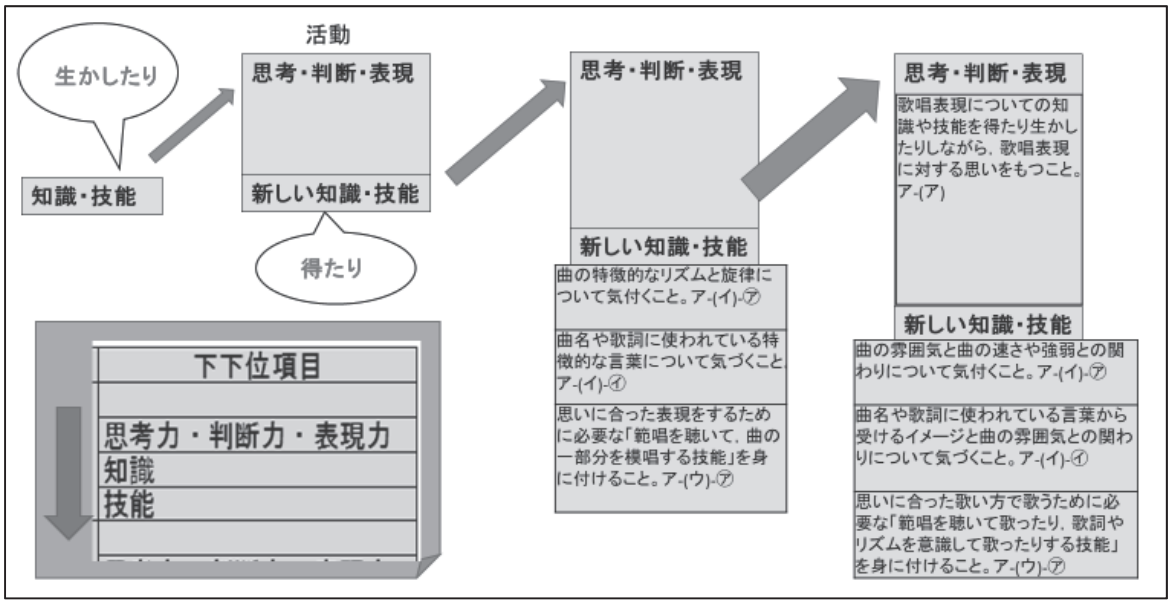
た学習内容表となり，単元計画等での目標設定や評価に活用しやすくなると考えた。「鑑賞」には，学習指導要領と同様，技能は設定していない。

ここで，下位項目の設定から，小学部1段階の「表現」は，小学部2段階の「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「身体表現」が，「音楽遊び」で統一されていることに気付いた。「学習内容表」では，この「音楽遊び」を「歌唱」の欄に便宜上記載しているものの，「音楽遊び」は，「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「身体表現」に分類されるものではなく，すべての音楽活動の基礎となり，子どもが遊びの中で音楽を楽しむところから学びが始まることが改めて分かった。

次に「思考力，判断力，表現力」「知識」「技能」の配列について検討した。学習指導要領において，他教科では，内容の配置が，目標と同様「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力」の順に並んでいるが，音楽科は，「思考力，判断力，表現力」「知識」「技能」の逆の順に配置されている。これは，音楽科の学習において，音や音楽を聴いて，児童生徒が自分なりに表そうとするためには，その過程で新たな知識や技能を習得することと，これまでに習得した知識や技能を活用することの両方が必要となるからである。また，児童の音楽活動と離れて，個別の「知識」の習得や「技能」の機械的な訓練にならないよう留意する必要があるからである。学習指導要領を踏まえ，本グループでは，「学習内容表」も学習指導要領と同じ並び順とすることとした。

グループで出た意見・考察等

本グループでは，項目の配列の検討に関連して，音楽科における育成を目指す資質・能力の，「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力」の関係について検討した〔図－35〕。



〔図－35　音楽における「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」の関係性〕

音楽では新たな「知識及び技能」を習得する前に，児童生徒がもともと習得していた知識及び技能を生かして，「まず，やってみる」ことにより，思考力，判断力，表現力を伸ばしていき，その中で新たな知識や技能が習得されていく，というサイクルで資質・能力が育まれているのではないかという意見が出された。

音楽では他の教科以上に，知識及び技能を得たり生かしたりするためには，思考力，判断力，表現力が大切であることが分かった。

音楽の学習内容表を作成する取組を通して，音楽の見方・考え方について考えを深めることができた。今回得た知見を，今後の授業作りにも生かしていきたい。

ク　図画工作・美術の「学習内容表」作成の取組

学習指導要領の精査と学習内容表の作成

本グループでは学習内容表を作成にするにあたって，まず，学部の目標の読み込みと分析から取り組んだ。目標には，小学部図画工作科から，中学部美術科，高等部美術科へと，それぞれ目指すべきところが総括的に示されているが，小学部，中学部，高等部と目標としてはあまり変わらないことが分かった。その中で，中学部以降に「美術や美術文化」の文言，高等部では「幅広い活動」の文言が入り，学ぶ対象や活動の広がりが表現されていることを確認した。

これを受けて，まずは「学習内容表」の構成を検討した。学習指導要領では，「A 表現」「B 鑑賞」「共通事項」の3つに分かれているが，「学習内容表」も同じ項目，下位項目にすることとした。「A 表現」の下位項目は，「思考力，判断力，表現力」と「技能」である。「B 鑑賞」の下位項目は，「思考力，判断力，表現力」である。共通事項の下位項目は，「思考力，判断力，表現力」と「知識」である。次に，より分かりやすく内容を示すため，例えば，平面と立体，素材などに分けて下下位項目を起こすことも検討したが，想定される活動の分類が細分化されすぎる点や，具体化しすぎると題材設定や児童生徒の表現の幅を狭めてしまう恐れがある点から，項目として設定するのは難しいと判断した。

次に，「学習内容表」の作成に当たっては，学習指導要領に示された内容が分かりやすくなるように，補足として学習指導要領各教科等解説から抜粋し，まとめることとした。

「A 表現」については，「表したいことを思いつくこと」「思いのままに素材に関わったり，発想したりすること」が習得を目指す内容であることを重視し，素材や作品作りを特定するのではなく，大きな枠で項目を捉えることが必要であると考えた。教師が示した見本どおりの作品を作ったり，手順や表現方法を限定する作業的な活動を行ったりすることよりも，素材に関わる時間を長くとったり，児童生徒の「さわってみたい。」

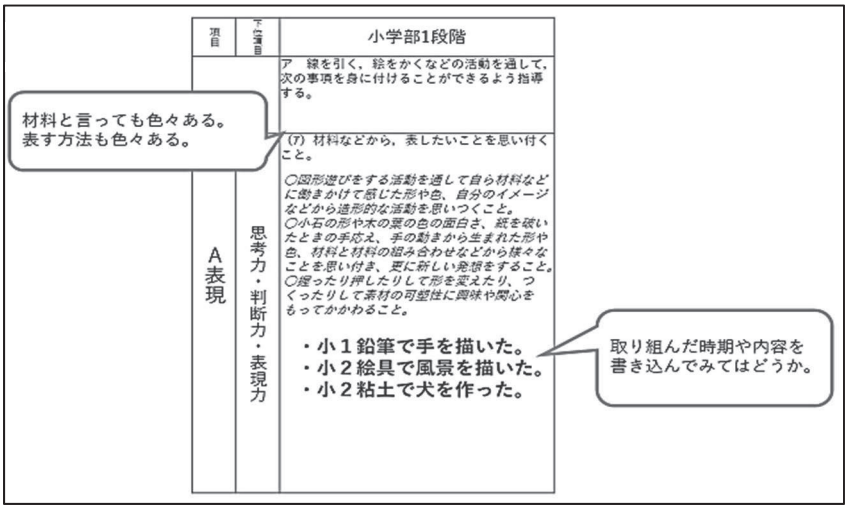
「つくってみたい。」という気持ちを引き出したりできるような授業作りを考えるというコンセプトで内容を整理した。

その場合，「学習内容表」を活用して目標設定しても，内容表から文言を転用するのではなく，大枠を示すにとどまるため，その後の個別具体的な内容は各担任で検討し，どのような活動を仕組めば目標達成となるのかまで考える必要がある。つまり，活動設定や子どもたちの実態に合わせた素材選びに関しては，教師の力量に大きく委ねられることとなる。

「B 鑑賞」についても，題材を具体的に示していないが， 例えば「身近な造形物」とあれば，何が「身近な造形物」なのか，解説の文言である「日用品，生活の中で生徒が感じられる物」を用いて括弧書きで補足するようにした。

「共通事項」については，学部・段階間の違いが明確になることを軸に，主に解説中の文言を活用して作成した。共通事項は，名称どおり，「A 表現」にも「B 鑑賞」にも通じるものであることから，抽象度の高い表現が多く，特に中学部以降は，段階による表記の違いについて説明していない箇所もあった。そのため，分かりやすい表現にするために，解説中の事例や授業内容を参考にし，かつ，全体的な文脈を踏まえて解釈を加えながら文言を追加し，違いをもたせるようにした。

最後に活用の仕方について検討した〔図－36〕。



〔図－36　学びの履歴として使用する際の表記の仕方の案〕

他の教科の「学習内容表」と異なり，図画工作・美術の内容表は項目を細かく分けず，表現の方法や題材も大まかであり，教師が「学びの履歴」としてチェックする際に，「何ができるようになったのか」という内容の習得を判断するための基準が具体的に示されていない。

そこで，本グループでは，取り組んだことや習得したことを確認できるよう，内容表に「取り組んだ内容・時期」，「習得した内容・時期」を書き込むという方法を提案したい。今後，図画工作・美術に限らず，他教科においてもこうした活用の仕方が必要かどうかを整理し，まとめていくことで，よりよい活用方法につながるのではないかと考える。

グループで出た意見・考察等

最後に，「学習内容表」作成に取り組む中で，グループ内で出た意見を紹介する。

学習指導要領に示された内容，特に高等部段階については，内容の抽象性と評価の難しさも含め，知的障害のある生徒が習得を目指すものとして妥当な内容であるか，教科担当レベルでの精査が必要であると思われる。

さらに，図画工作・美術の目標を，「段階」という形で示すこと自体に違和感をもった者もいた。例えば，高等部段階で「豊かに」という文言が出てくる。高等部生が，それまで習得を積み重ねてきた内容を生かして，何が美術的に豊かであるかの理解を言葉にしたり，技法として活用したりするという意味で捉えられるが，自身の内なるものを衝動のままに表現した「豊かさ」は，アール･ブリュットなどのジャンルもあるとおり，小学部1段階相当の児童生徒であっても，自由な感性を生かした作品を「豊かに」生み出すことができる。

知的障害のある児童生徒のための教育課程において，教科等の目標・内容を，小･中学校に準じ，定型発達の基準で配列することが，実際の単元・題材設定や授業作りとどの程度有機的に関連付けられるのか，実践を積み重ねながら検証する必要がある。そのような検討を通して，より児童生徒のニーズに応じた本校独自の「学習内容表」につなげていきたい。

ケ　体育・保健体育の「学習内容表」作成の取組

学習指導要領の精査と学習内容表の作成

本グループでは，まず各学部の目標の違いについて話し合った。

小学部と中学部は，課題に「気付き」と「見付け」の文言の違い以外は同じであることが分かった。高等部では，課題を「発見し，合理的・計画的な解決に向けた主体的・共同的な学習過程を通して」という文言が入っており，そのことから，高等部段階では，発見するだけでなく，解決に向けて主体的，共同的に取り組まなければならないことが分かった。また，小・中学部では「豊かなスポーツライフを“実現”する」となっているが，高等部では「豊かなスポーツライフを“継続”する」となっており，生涯スポーツをより意識した目標になっていると捉えられた。

次に，学習指導要領に示されている目標を3つの柱に沿って読み込み，意見交換を行った。

知識及び技能について，知識面では，小学部「身近な生活」から中学部「自分の生活」へ，さらに高等部「個人生活及び社会生活」へと広がっている。また，中学部からは「安全」という文言が追加され，「知る」→「理解する」→「理解を深める」へと発展している。技能面では，小学部「基本的な動きや健康な生活に必要な事柄を身に付ける」，

中学部「基本的な技能を身に付ける」，高等部「目的に応じた技能を身に付ける」となっており，段階ごとに内容が深まっていることが伺えた。

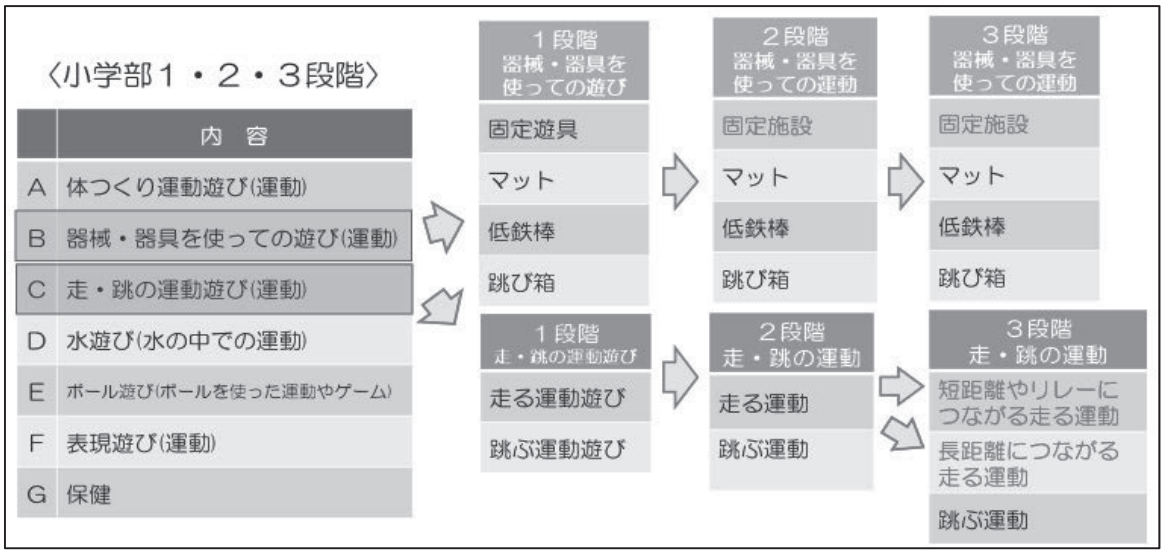
思考力，判断力，表現力等については，小学部「自分の課題に気付く」，中学部「自分の課題を見付ける」，高等部「自他や社会の課題を発見する」とあり，自己から他者，社会へと対象が広がっていることが分かった。そして，課題解決に向けて，「自ら考え行動する」「自ら思考し判断する」「目的や状況に応じる」と，判断力も高まっていることが読み取れた。

学びに向かう力，人間性等については，小学部「遊びや基本的な運動に親しむ」であるが，中学部・高等部では「生涯にわたって運動に親しむ」と卒業後も想定した表現がなされてる。特に高等部では，将来の生活を意識して，「自他」「社会」「目的」「状況に応じ」という表現が用いられている。

次に，各学部の目標について段階の違いを読み込んだ。小学部では，1段階では「教師と一緒に」，2段階では「教師の支援を受けながら」に見られるように，3つの段階がスモールステップで丁寧に記載されている。中学部は，1段階・2段階いずれも，小学部や高等部ほど明確な違いはないように感じ，小学部の3段階は，中学部の段階と変わらないようであるとの意見も出された。高等部は，1段階「『個人生活』に必要な健康・安全に関する事項などを理解する」，2段階「『個人生活及び社会生活』に必要な健康・安全などの理解を深める」とあり，対象が「個人生活」から「個人生活及び社会生活」に広がっていることが分かった。また，2段階では「理解を深める」だけでなく，「目的に応じた技能を身に付ける」とあり，ここでも，卒業後の生活を強く意識した目標となっていることが確認できた。

次に項目を整理した。文言の末尾に注目すると，小学部の1段階では「遊び」，2段階からは「運動」となっている。これは，小学校学習指導要領の体育も同じような構成である。中学部では「武道」，高等部では「体育理論」が追加されてる。また，小学部での「器械・器具を使っての運動」が「器械運動」，「走・跳の運動」が「陸上競技」と名称が変更になっていることを確認した。

こうした内容であることを受け，項目ごとに示された「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の柱に沿って示された内容について検討した。そこでは，どの項目においても，同じ表現がされていることが分かった。運動内容は変わっても，身に付けたい力は変わらず，学習活動を通して身に付けたい資質・能力が明確に示されていると捉えられた。しかし，具体的に「何をどのようにして学ぶのか」については，明示されていない。そのため，授業作りに生かしやすい学習内容表を作る必要性を感じた。例えば，「マット運動の前転は，何学部の何段階か」「何学部の何段階で鉄棒の逆上がりに取り組むか」等が分かれば，授業を計画する際により使いやすいものになると考えた。そこで，学習指導要領各教科等解説をさらに読み込み，参考となる内容を抽出することとした。



〔図－37　例示からの下位項目の設定〕

解説では，体系的に項目が分けられ，各項目の内容について運動内容が【例示】として挙げられ，具体的に何をするのかが示されている。この【例示】をもとに，さらに項目のまとまりを細分化することとした〔図－37〕。

例えば，運動内容として「自分の能力に適した動きや技能を身に付けること。」という表記があるが，その運動内容ができるようになること，その運動の「知識及び技能」だけでなく，これらの活動を通して，他の柱である「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」も併せて身に付けることが重要であることが読み取れた。

最後に，もう一度項目の見直しを行う中で，学習指導要領に示された項目のうち，中学部，高等部で学ぶ「武道」は，本校において扱わないこととした。中学部や高等部では，小学部段階相当の生徒も学習集団に含まれることを鑑み，小学部で学んできた「集団によるゲームや運動の重要性」と「対話的な学び」を引き続き重視して授業作りを行っていくべきではないかと考えたためである。その際，中学部や高等部の教科の目標が達成されるよう，「武道」以外の指導内容を十分工夫する必要がある。

また，高等部「体育理論」について，高等部の運動に関する他項目との関連で指導することが効果的であると捉え，各項目の「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力」で取り扱うこととした。

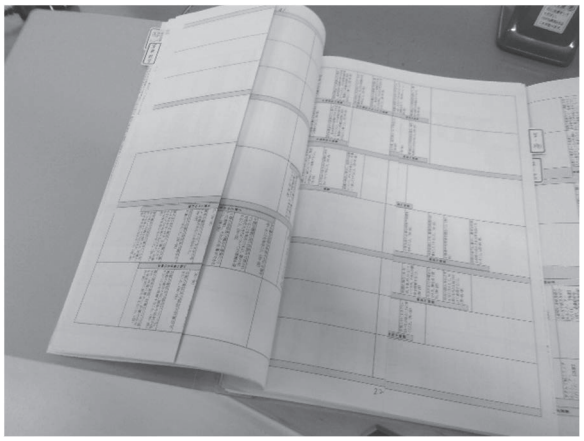
グループで出た意見・考察等

今回，体育・保健体育の「学習内容表」の作成では，学習指導要領が卒業後の姿を意識した目標設定をしていることを踏まえた上で，運動内容を記載することで，習得を目指す内容を押さえつつ，より学びの積み上げが把握しやすい「学習内容表」とすることができた。今回，「学習内容表」に運動内容を取り上げて記載したこと，「武道」や「体育理論」の取扱いに係るグループからの提案については，今後，「学習内容表」の活用の実践を積みながら，改めて検討していきたいと考える。

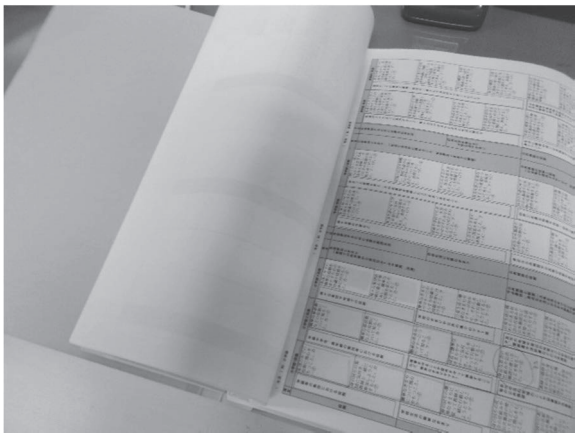
(4)　「佐大附特版学習内容表」の完成

以上のように，各グループで作成した「学習内容表（案)」は，研究推進委員会で検討し，「佐大附特版学習内容表」〔**表－13**〕として完成させた。完成した「学習内容表」は，年間指導計画作成や，単元計画，日々の授業計画の際に活用できるよう，教師用「学習内容表ファイル」〔**図－38**〕として配布した。

また，「学習内容表」を児童生徒の各教科の内容の習得状況や，今年度取り扱う内容の把握，学習の記録のための「学びの履歴」〔**図－39**〕として，ファイルに綴じたものを配布した。



〔図－38　教師用の「学習内容表」ファイル〕



〔図－39　「学びの履歴」ファイル〕

〔表－13　「学習内容表」（国語）の一部〕

（　国語　）科　小学部

項目	下位項目	下下位項目	小学部1段階	小学部２段階	小学部３段階
知識・技能	言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		身近な人の話し掛けに慣れ，言葉が事物の内容を表していることを感じること。ア-(ア) *〇身近な大人や兄弟，友達からの話し掛けに耳を傾け，人との関わりの中で言葉が用いられていることに注意を向けること。* *〇やり取りを繰り返す中で言葉と事物とが徐々に一致してきたり，自分なりの表現を繰り返す中で要求が相手に伝わり，心地よい感情をもったりすること。*	身近な人の話し掛けや会話などの話し言葉に慣れ，言葉が，気持ちや要求を表していることを感じること。ア-(ア) *〇人の話し言葉，テレビやラジオなどの媒体を通した音声に聞き慣れること。* *〇言葉を用いることで，自分が感じた気持ちや要求などが相手に伝わることを感じること。*	身近な人との会話や読み聞かせを通して，言葉には物事の内容を表す働きがあることに気付くこと。ア-(ア)
			言葉のもつ音やリズムに触れたり，言葉が表す事物やイメージに触れたりすること。ア-(イ) *〇様々な言葉を聞いたり，音声の高低や抑揚などの違いによる意味の違いに触れたりすること。* *〇実際の事物などを見たり触ったりして実感し，言葉と事物とを結び付けたり，生活経験からいろいろなことを想起し，それらを言葉と結び付けて表現したりしていくこと。*	日常生活でよく使われている平仮名を読むこと。ア-(イ) *〇身近な事物や事象を表す平仮名を指したり，自分や友達の名前や絵本などに出てくる動物等の名前を表す平仮名を読むこと。*	背筋を伸ばし，声を十分出しながら落ち着いた気持ちで話すことや，正しい発音のために，唇や舌などを適切に使うこと。ア-(イ)
				身近な人との会話を通したやり取りを深める中で，物の名前や動作などいろいろな種類の言葉を聞いたり，自分でも話したりすること。ア-(ウ)	日常生活でよく使う促音，長音などが含まれた語句，平仮名，片仮名，漢字の正しい読み方を知ること。ア-(ウ) *〇絵本や易しい読み物，わらべ歌，テレビやコンピュータの画面に出てくる促音，長音等の含まれた語句や短い文，平仮名，片仮名，簡単な漢字などを取り扱うこと。*
					言葉には，意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。ア-(エ) *〇ある語句を中心として，同義語や類義語，対義語など，その語句と様々な意味関係にある語句が集まって構成していることに気づくこと。*
					2語から3語で構成する文を題材に，主語や助詞が変わることで表す状況が変化することを理解すること。ア-(オ)
					明瞭な発音で文章を読むこと，ひとまとまりの語や文として読むこと，言葉の響きやリズムなどに注意して読むこと。ア-(カ)

（　国語　）科　中学部

項目	下位項目	下下位項目	中学部1段階	中学部２段階
知識・技能	言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		身近な大人や友達とのやり取りを通して，言葉には，出来事や事物の内容を表す働きや，経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。ア-(ア)	日常生活の中での周りの人とのやり取りを通して，言葉には，考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。ア-(ア) *〇日常的に用いている言葉には，思考や感情を表す働きがあるということに気付くこと。*
			相手に内容を正確に伝えるために，発声や声量，姿勢や口形などに注意しながら話すこと。ア-(イ)	話している内容が聞き手にはっきりと聞き取れるような発声や発音をしたり，音声が明瞭に聞こえる速さや相手に声が届く音量などに注意したりして話すこと。ア-(イ)
			長音，拗音，促音，撥音，助詞の正しい読み方や書き方を知ること。ア-(ウ) *〇日常生活や社会生活で用いられる語句や文，文章を読んだり書いたりすることを通して，その規則性に気付き，身に付けていくこと。*	長音，拗音，促音，撥音などの表記や助詞を，文や文章の中で使うこと。ア-(ウ)
			言葉には，意味による語句のまとまりがあることを理解するとともに，話し方や書き方によって意味が異なる語句があることに気付くこと。ア-(エ) *〇語句相互の意味関係を理解し，語句には同義語や対義語，上位語・下位語，同音異義語，多義的な意味を表す語句などがあることに気付くこと。*	理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し，使える範囲を広げること。ア-(エ) *〇様子や行動，気持ちや性格を表す語句などを，様々な人との関わりの中で聞いたり話したり，文章の中で書いたり読んだりすることを通して，自分の語彙として身に付けていくこと。*
			主語と述語の適切な係り受けを理解するとともに，前後の文節や文などをつなぐ働きをもつ語句の役割を理解すること。ア-(オ)	修飾語がどこに係るのかという修飾と被修飾との関係を理解するとともに，物事を指し示す役割をもつ語句について理解すること。ア-(オ)
			普通の言葉との違いに気を付けて，丁寧な言葉を使うこと。 *〇丁寧な言葉と普通の言葉を相手や場面に応じて使い分けることに気を付けて話すこと。* ア-(カ)	敬体と常体があることを理解し，その違いに注意しながら書くこと。ア-(カ) *〇相手や目的を意識して表現する際などに，敬体と常体との違いについて注意しながら書くこと。*
			文や文章の内容を理解したり，相手が正しく聞き取ったりすることができるように，明瞭な発音で文章を読むこと，ひとまとまりの語や文として読むこと，言葉の響きやリズムなどに注意して音読すること。ア-(キ)	一文一文などの表現だけでなく，文章全体として何が書かれているかを大づかみに捉えたり，登場人物の行動や気持ちの変化などを大筋で捉えたりしながら，音読すること。ア-(キ)

（　国語　）科　高等部

項目	下位項目	下下位項目	高等部1段階	高等部２段階
知識・技能	言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		社会生活に係る人とのやり取りを通して，日常的に用いている言葉の働きと同様に，場を広げた社会生活で用いる言葉にも，考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。ア-(ア)	社会生活に係る人とのやり取りを通して，言葉には，相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと。ア-(ア)
			相手を見て話したり聞いたりするとともに，間の取り方などに注意して話すこと。ア-(イ) *〇言葉の抑揚や強弱などを含め，話し手が一方的に話すのではなく，話の内容を聞き手にとって聞き取りやすくしたり，理解してもらったりすること。*	話し言葉と書き言葉，それぞれの特色や役割に気付くこと。ア-(イ)
			漢字と仮名を用いた表記や送り仮名の付け方を理解して文や文章の中で使うとともに，句読点の使い方を意識して打つこと。ア-(ウ)	「漢字仮名交じり文」という日本語の表記の仕方を踏まえ，文や文章の読みやすさや意味の通りやすさを考えて，漢字と仮名を適切に使い分けること。ア-(ウ)
			表現したり理解したりするために必要な語句の量を増し，話や文章の中で使うとともに，言葉には，性質や役割による語句のまとまりがあることを理解すること。ア-(エ) *〇様々な語句をその特徴や使い方によって類別して捉えるということ*	社会生活の中で表現したり理解したりするために必要な語句に加え，思考に関わる語句の量を増し，話や文章の中で使うことを通して，言葉への関心を高め，さらに語彙を豊かにしていくこと。ア-(エ)
			つなぎ言葉の役割，段落の役割について理解すること。ア-(オ)	文と文との接続の関係，話や文章の構成や種類について理解すること。ア-(オ)
			学校内や職場実習等の学校外での様々な立場の人々との関わりの中で必要となる尊敬語や謙譲語など理解し使うこと。ア-(カ)	会話の中だけでなく，公的な場面で改まった言葉遣いをすることの他，手紙や作業等の報告書を書いたりする際に相手や目的に応じた語句を選んで用いること。ア-(カ)
			より適切に内容の大体を捉えるために，文章全体の構成を意識しながら読むこと。ア-(キ)	文章の構成や内容を理解して音声化することに加え，自分の思いや考えが聞き手に伝わるように音読や朗読をすること。ア-(キ)

2　「学習内容表」の活用

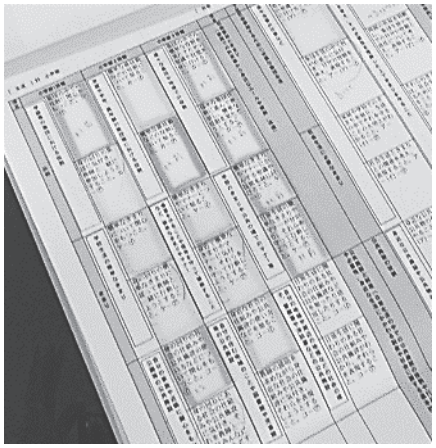
上記の1の（4）のとおり，完成した「学習内容表」は，教師用の「学習内容表ファイル」と「学びの履歴ファイル」の形で活用している。

まず，教師用の「学習内容表ファイル」は，当初の目的のとおり，教育計画の各段階でそれぞれに活用されているところである。特に，年間指導計画や単元計画については，指導内容を記述することとなっているので，学習内容表から語句を抜き出して作成している。また，目標達成のために，どんな指導内容を取扱い，どんな内容の単元計画を立てるかについて考える際の参考としている。

「学びの履歴」としての活用については，「学習内容表」作成グループからの意見も踏まえ，記入の仕方なども統一した上で，2年次の前期に「学びの履歴」記入の時間を設け，一斉に取り組むこととした〔表－14〕。この時点では，「音楽」「図画工作・美術」「体育・保健体育」の学習内容表はまだ完成できていなかったため，「国語」「算数・数学」「生活－職業・家庭（職業分野）－職業」「生活－職業・家庭（家庭分野）－家庭」について記入した〔図－40〕。

〔表－14　学びの履歴チェックの目的と方法〕

<table>
<tr><th colspan="2">目　的</th></tr>
<tr><td colspan="2">各教科の「学習内容表」について，その学部・段階の資質・能力が育成されたかどうかを判断し，「学びの履歴」として一覧表にして視覚化することで，児童生徒の各教科の実態及び学習状況を的確に把握する。また，その年度に取り扱う学習内容を記入しながら，チェックした内容を年間指導計画や個別の指導計画に反映させ，「佐大附特システム」の機能を強化するとともに，本校のカリキュラム・マネジメントの推進を図る。</td></tr>
<tr><th colspan="2">方　法</th></tr>
<tr><td rowspan="3">最初にチェックすること</td><td>小学部1段階から順に学習内容を確認し，その内容についての資質・能力が習得できていると判断できるものについては，緑のマーカーで枠囲みする。</td></tr>
<tr><td>これまでに取り扱ったことがある内容だが，その内容についての資質・能力が身についたとは言えない場合や，般化や定着を図るなどするため，今後も個人目標に設定して取り組みたい内容については，黄色のマーカーで枠囲みする。</td></tr>
<tr><td>記入の時点で，習得の状況や目標設定の見通し等において判断が難しい場合は，鉛筆で枠囲みし，その旨を記入する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">今年度の個別の指導計画や年間指導計画と合わせてチェックすること</td><td>今年度取り扱った内容や，9月以降で取り扱いたい内容の枠内に，鉛筆書きで「R〇前（後）」と書き入れる。年間を通して取り扱う内容や取り扱う時期が決定していない場合は，年度のみ記入する。</td></tr>
<tr><td>鉛筆書きで枠囲みしたもののうち，既に扱った内容や必ず扱う内容については黄色のマーカーで枠囲みする。取り扱うかどうか現時点では不明な場合は，マーカー記入はしない。</td></tr>
</table>



今後は，令和4年度に向けた年間指導計画（案）の作成に先駆け，児童生徒一人ひとりの全教科の「学びの履歴」チェックに取り組む予定である。

〔図－40
学びの履歴チェックの様子〕

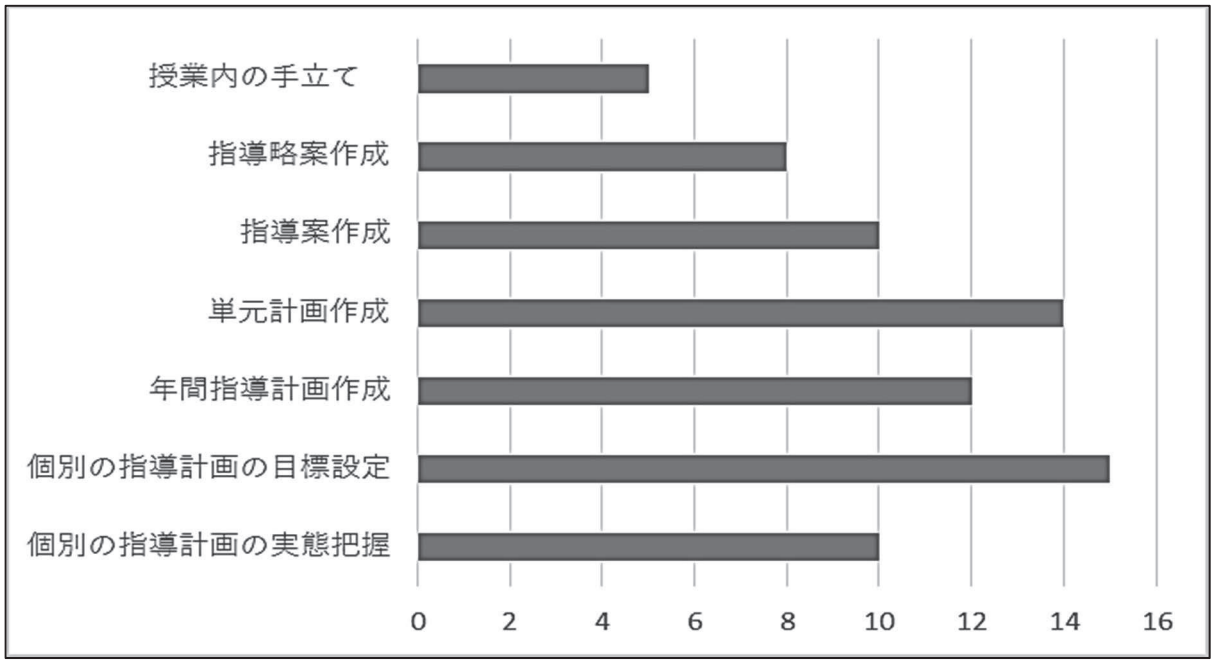
3　「学習内容表」の作成と活用に係るアンケートの結果

(1)　1年次の「学習内容表作成に係るアンケート」の集計結果

研究1年次に取り組んだ「学習内容表」（国語，算数・数学，生活－職業・家庭（職業分野）－職業，生活－職業・家庭（家庭分野）－家庭，生活－社会，生活－理科）作成後に，「学習内容作成に係るアンケート調査」を行った。

質問項目としては，選択形式の「学習内容表を今後のどのような取り組みに生かしていきたいか。」と，記述式の「私たち教師の学びとなった事項及び検討が不十分な事項」についての気付き等の自由記述で行った。

「学習内容表を今後のどのような取り組みに生かしていきたいか。」〔図－41〕については，個別の指導計画作成と単元計画作成が特に多く上げられた。いずれも，児童生徒一人ひとりの目標設定が含まれており，担任団を中心に，個人目標の設定に課題意識があり，その際にこの「学習内容表」を活用したいという傾向が読み取れた。



〔図－41　「学習内容表を今後のどのような取り組みに生かしていきたいか」集計結果〕

「私たち教師の学びとなった事項及び検討が不十分な事項と自由記述(抜粋)」〔表－15〕では，全体として，小学部，中学部，高等部の各教科の系統性については実感された一方で，我々教師の教科の見方・考え方の習熟には，学習指導要領や解説に書かれている内容の理解をさらに深めることが必要であると上げられていた。「学習内容表」を生かしていくためには，内容表自体の改善と，活用の方法を整備し，共有することが重要であり，「佐大附特システム」に基づいた取組を積み重ねながら検討を深めていかなければならない。

また，各教科等の資質・能力の育成に関して，教科の系統性や指導内容の習得・取扱いに着目した授業作りをした場合，教科の内容を押さえることを優先するあまり，知的障害のある児童生徒の学び方やペースに合わせ，実際の生活に根ざした現在と将来に生きる力を育成するという特別支援教育の本質が軽視されてしまうのではないかなどの意見も上がった。

〔表－15　私たち教師の学びとなった事項及び検討が不十分な事項と自由記述(抜粋)〕

	学びとなった事項	不十分な事項
学部間のつながり	・各教科の目標や内容を，小学部，中学部，高等部の縦のつながりで見ることができた。 ・小学部生活科と職業・家庭や理科，社会などのつながり・系統性を見ることができた。 ・小学部から中学部，中学部から高等部といった次の段階に進むために必要な事項を押さえることができた。 ・指導内容を考える際には，学部の学習指導要領だけでなく，他学部も参考とすべきであることを再確認できた。	・1つの教科をとっても，学部・段階がすべてスムーズにつながるとは限らないので，その整理が必要となる。 ・小学校学習指導要領と比較して，学習のつながりのもたせ方が難しいので，その検討が必要となる。
各教科の学習内容	・教科ごとに，教科としての見方・考え方に特質があることを知ることができた。(良い点も難しい点も)。 ・高等部段階の目標や内容のレベルの高さに驚いた。	・学習内容が多く，一律にこれだけの学習内容を網羅して学習させるのは難しい。それを実現するためには，綿密な計画を立てる必要がある。 ・各教科の目標や内容の系統性は，知的障害のある子どもの学びの実態に応じたものと言えるのか，特別支援教育の理念や方向性と合わせて，本校なりに追究していく必要がある。

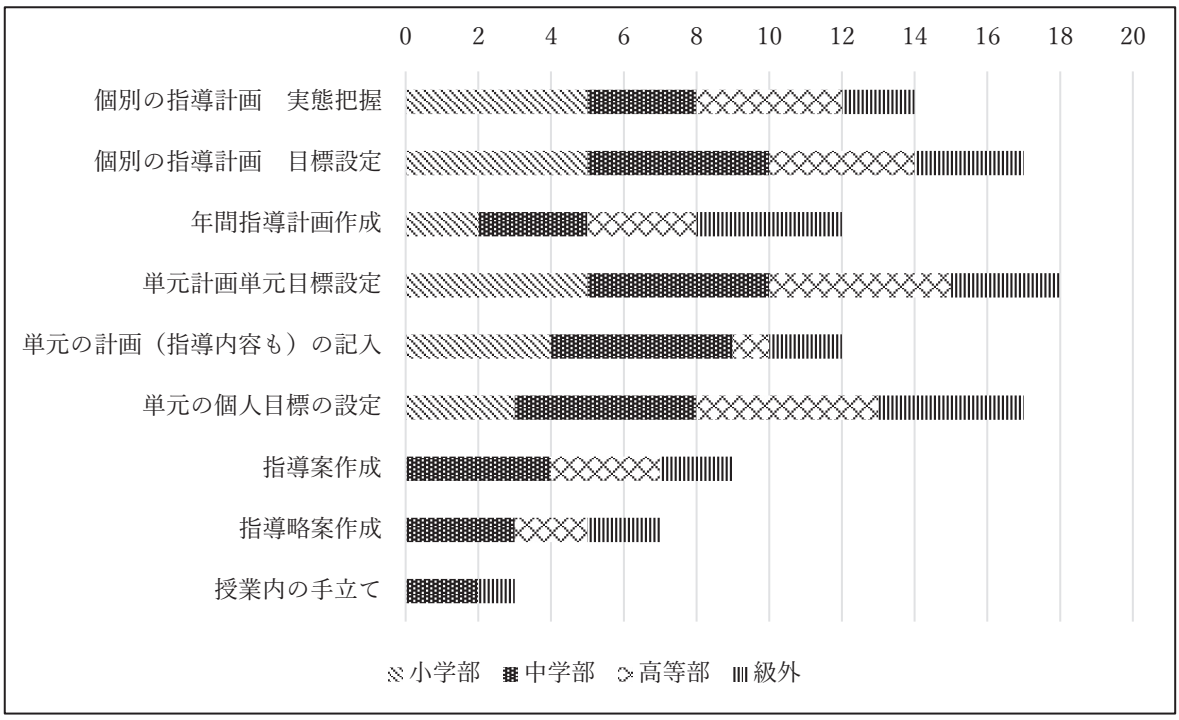
今後の取組	・今回，学習指導要領をしっかり読み込みながら取り組めたので，やらなければならないことが明確になった。 ・「学習内容表」を「学びの履歴」として活用すれば，実態把握の一助となることが分かった。 ・各段階の教育計画立案の際に，これまでの指導内容との重複が少なくなると思う。	・「学習内容表」を実態把握や目標設定に活用できるようにするためには，各教科で統一した様式で見やすいものになるまで表自体を練り上げる必要がある。 ・作成しただけでは意味がないので，これをどのように生かしていくかが今後の課題である。
その他，自由記述		
・縦割りのグループで検討を行ったことにより，小学部・中学部・高等部それぞれの現在の授業の様子や，児童生徒の実態を知ることができ，学部間のつながりを考えることができた。 ・全体の教育計画と個別の指導計画は，両輪として捉えなければならないと考える。個に応じた学習計画や評価が必要であると同時に，学校全体としての教育計画が必要である。この学校全体の計画を踏まえないと，学部間のつながりのある指導にはならない。		

(2)　2年次の「学習内容表作成及び活用に係るアンケート」の集計結果

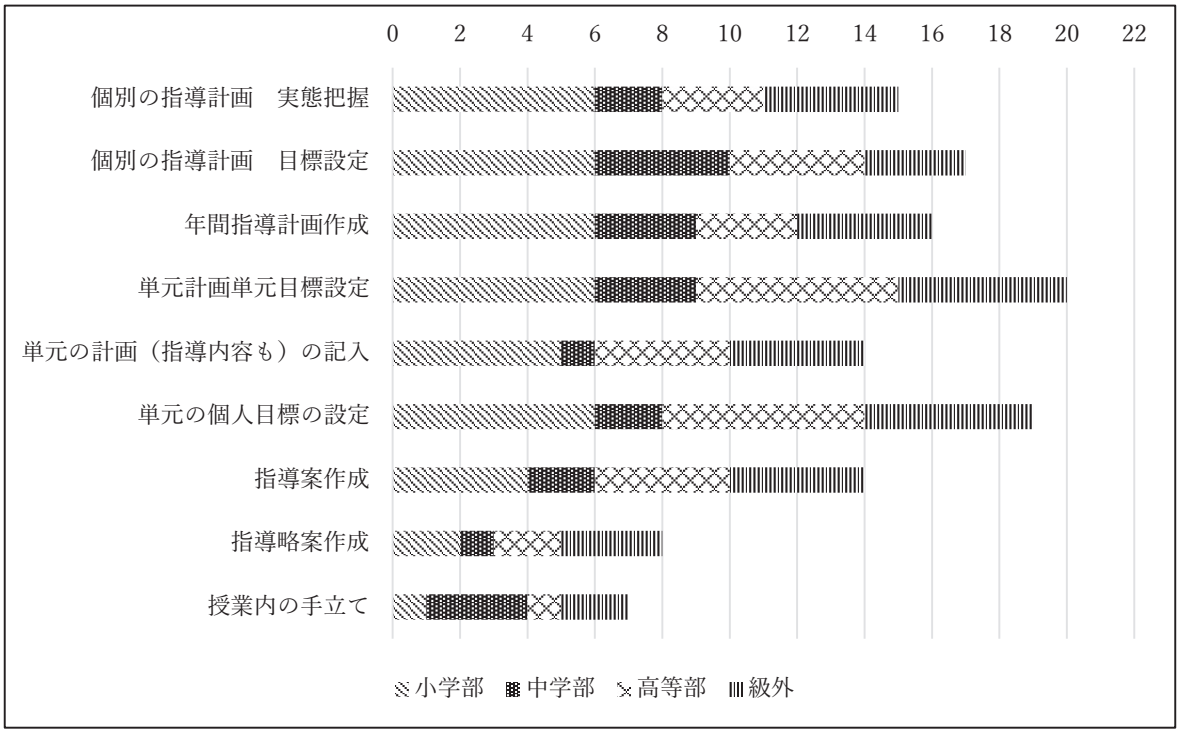
今年度(研究2年次)の「学習内容表」作成の取組（音楽，図画工作・美術，体育・保健体育）後に，「学習内容表の作成と活用にかかるアンケート調査」を行った。

前回アンケート時に比べ，年間指導計画作成や見直し，単元計画や評価の場面等での学習内容表を活用する取組みを進めてきているところで，さらに「学びの履歴」のチェックも実施していたこともあり，多くの意見が上がってきた。

まず，「学習内容表をこれまでの主に何に活用してきたか。」〔**図－42**〕と「学習内容表をこれから主に何に活用していきたいか。」〔**図－43**〕の質問については，　これまでの活用として，個別の指導計画の実態把握や目標設定及び単元計画での目標設定での活用が中心であり，1年次のアンケート結果とも連動した結果となった。今後については，目標設定のみならず，カリキュラム・マネジメントに係るいろいろな業務に活用したいという意見が多くなっている。これまでの活用の実績や状況を踏まえ，今後，活用の場面がもっと広げられるのではないかという期待も含まれていると考える。



〔図－42　学習内容表のこれまでの活用についてのアンケート結果　〕



〔図－43　学習内容表のこれからの活用についてのアンケート結果〕

「作成に取り組んで，分かったこと，感じたこと」の自由記述について〔表－16〕は，「各教科の段階やつながりについて」，「各教科の見方・考え方について」，「知的障害特別支援学校における教科学習について」の3つの視点でまとめることができた。

〔表－16　学習内容表作成に取り組んで，分かったこと，感じたこと〕

「各教科の段階やつながりについて」
・児童生徒の現段階で育成を目指す資質・能力に加え，次の段階に進んだ際に目指すべきことを知る機会になった。次にどのような目標を設定したらよいのかや，その目標を達成するためにどんな活動を仕組んだりしたらよいのかについて考えやすくなった。 ・小学部は，児童の発達に沿って段階の違いが分かりやすい目標や内容が示され，高等部は卒業後の生活や生涯学習を意識した目標や内容になっていると捉えられるが，中学部の目標や内容については，小学部からの積み重ねの傾向と，高等部以降の社会参加を意識した前段階と，両学部の狭間にあり，解釈が難しいと感じた。
「各教科の見方・考え方について」
・各教科の目標や内容を読むだけでは，表現が抽象的だったり，文言の違いが小さかったりして，分かりにくい部分もあった。しかし，解説を丁寧に読み込むことで，具体的なイメージをもつことができた。 ・「思い付くこと」「思いをもつこと」などが内容として上がっている教科については，児童生徒のどのような姿をもってその内容を習得したと判断するのかの基準を明確にもっておく必要があり，現段階では，目標の達成状況の把握に活用することは難しいと感じた。
「知的障害特別支援学校における教科学習について」
・障害の特性を考慮した場合，「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力」「学びに向かう力・人間性等」をバランスよく育成するためにどう考えればいいのか整理が必要である。 ・高等部段階（特に2段階）の内容の習得や目標の達成は，現実的にかなり難しいと感じた。 ・各教科の目標や内容は捉えられても，知的障害のある児童生徒がどのように学べば内容を習得できるのかといった，授業の活動内容や指導・支援の具体的なイメージをもつことは難しかった。

また，「学習内容表作成の問題点とその改善について」〔表－17〕の意見も上げられていた。まず，教科ごとにグループで話し合って作成したものなので，教科ごとのまとめ方の違いが大きいという意見が上げられた。教科の見方・考え方に関する教科ごとの独自性を踏まえつつも，評価の妥当性を高めることと関連させて，総合的・客観的な視点で見直す必要がある。

また，小学部生活から中学部，高等部の教科へのつながりについての指摘が多く挙げられた。

今期研究では，研究テーマにもある「つなぐ」をキーワードとして，小学部生活の内容を，中学部職業・家庭(職業分野)－高等部職業，中学部職業・家庭(家庭分野)－高等部家庭，中学部・高等部社会，理科につなげて作成したが，小学部生活の1つの項目について，中学部の複数の教科に重複して配置される状況が生じた。例えば，小学部生活の「キ　手伝い・仕事」の項目については，職業，家庭，社会の3教科の「学習内容表」に配置されている。そのため,「学習内容表」を活用して個別の指導計画の目標を立てる際に，同じ目標が異なる教科で上げられる状況が生じた。

「学習内容表」において，小学部生活から他の教科へ目標・内容を接続させることにより，児童生徒の実態に相応の学部･段階に応じた個人目標の設定ができるようになったが，今後は上記のような混同をなくすことも含め，各教科の目標・内容を，教育課程上の位置付けから吟味・検討を行い，十分整理した上で活用につなげることが課題となる。

〔表－17　　学習内容表作成の問題点と改善の方向性〕

問題点	・教科ごとのグルーピングで「学習内容表」の作成にあたったため，教科内の縦のつながりは十分に整理できたが，教科間の横のつながりまでは意識できなかった。また，作成のコンセプトに違いがあるため，それを基に評価しようとすると，目標や評価の統一感がなくなるのではないか。 ・小学部生活科の項目の，職業や家庭，理科，社会への振り分けが妥当であったかの検証が必要である。また，1つの項目が複数の教科に重複して振り分けられていることで,「学びの履歴」での二重チェックや個別の指導計画の教科等の目標設定の揺れなどの問題が出てきている。 ・「学習内容表」の中で，中学部・高等部の教科から小学部生活科への，段階の横揃えができていない教科があり，対応する内容を「学習内容表」から探し回ることになる。
改善の方向性	・教科担当の教師でなくても目標や内容が理解できるよう，誰もが使いやすいものにしていくために,「学習内容表」の見直しや改善の時間を設け，内容の具体例の作成に取り組みたい。 ・「学習内容表」に示される「何を学ぶか」という内容だけではなく,「何ができるようになるか」という生活上の具体的な成長の状況についても捉えられるよう,「学習内容表」をより具体的に示せればよい。

また,「学習内容表を学びの履歴としての活用の問題点と改善の方向性」**〔表－18〕**についても自由記述で意見を募った。

「学びの履歴」として活用すること自体については，意義があるとする意見が多かった。しかし，各教師によるチェックの段階で，「習得した」との判断が難しいこと，1文に複数の内容が含まれるなど表記の仕方に工夫が必要なことなどが挙げられた。各教師が根拠のある評価基準をもつことが求められる。また，「学びの履歴」として，より活用しやすくするための，データベース化等の必要性等も挙げられた。このような視点も，「学習内容表」の改善には必要なことであると言える。

〔表－18　「学びの履歴」としての活用の問題点と改善の方向性　〕

問題点	・「学びの履歴」は紙媒体であるため，一人が手にとっていたら，その間，他の人は見ることができない。 ・「学びの履歴」をチェックする際は，新担任で評価できる部分と難しい部分があった。「知識及び技能」は評価しやすいが，「思考力，判断力，表現力」は難しかった。また，教師個人で行うので，判断の客観性や妥当性に疑問がある。何をもってその内容を習得できたとみなすのか，教師によって異なる場合があると考えられる。 ・1つの枠内の内容でも幅があったり，複数の意味合いが込められたりしているものがあり，チェックの仕方を工夫する必要がある。 ・児童生徒が理解しできるようになったことについて，時間をおくと忘れてしまっていたり，できなくなったりしていることもあり，「学びの履歴」をチェックする時点において，定着できているのか判断に迷うことがある。
改善の方向性	・「学びの履歴」は毎年積み上がっていくものなので，チェックする教師も内容の理解が進み，個々に判断ができるようになれるのではないか。 ・各個人の「学びの履歴」が一目で分かるように，また，複数で見合うことができるようにデータベース化やリスト化を行う。 ・一つの枠内の内容でも，幅があったり複数の意味合いが含まれたりしているものについては，「補足を鉛筆で書く」，「内容の枠は黄マーカーで囲み，達成している一部分は文に緑マーカーでチェックをする」「できている度合いを○△等で示す。」などのチェックの仕方を検討する。

「学習内容表」の作成と活用の取組については，「学習内容表」自体の内容や「学びの履歴」として活用する中での問題点と改善の必要性が多く挙がっているものの，「学習内容表のこれからの活用」の数値の伸びにも表れているように，積極的な活用やそのためのアイデア，取組の充実に向けた前向きな意見が出されている〔表－19〕。

今後も，活用の方法や内容の工夫を重ねながら，「学習内容表」の活用を充実させ，よりよい教育計画と授業実践及び評価となるよう，カリキュラム・マネジメントの取組として推進したい。

〔表－19　学習内容表のこれからの活用　〕

・教師の経験や力量の差に大きく左右されずに教育計画を作成できるよう，「学習内容表」を生かしていきたいと考える。 ・カリキュラム・マネジメントに係る各計画等の目標設定の際などに活用していきたい。 ・「学習内容表」を活用し，年齢相応の学びを把握したり，実態に応じた学びを把握したりして，児童生徒が満足感や達成感，充実感を味わえるような授業作りを行っていきたい。 ・「学習内容表」を索引として使い，しっかり目標や内容を理解するために，また学習指導要領解説を読み込むようにしたい。 ・個別の指導計画の目標の評価や，単元計画の個人目標の評価の際の基準として活用していきたい。